

## エコキャンプによる 環境への意識変容について

○小泉紀雄（日本体育大学）

キーワード エコキャンプ・自然・自然保護・野外活動

### 1、はじめに

文部省生涯学習局より平成8年7月に出された「青少年の野外教育の充実について」の報告によると、中央教育審議会答申で指摘している青少年の『生きる力』の育成を図る上で、自然体験活動を捉える野外教育の充実は重要であるとしている。

自然体験活動は自然の中で、感性や知性を研ぎ、自然への理解を深め、創造性や向上心を育み、自主性と協調性・社会性を育てる教育的手段としての直接体験学習を通じて、余暇活動の楽しみ方を学び、心身を回復し自己を発見する知識をもたらし、啓発から自己実現へと寄与するものと確信する。そのためにも野外教育プログラム（プログラム開発・実施期間の長期化や自然環境問題等）の充実と安全衛生管理の確率及び人と自然との関わりからキャンプを通じての環境教育のあり方を図る必要がある。

### 2、研究目的

そこで本研究はテーマを「自然と人間」と題しエコロジーキャンプを通じて自然体験活動を通じて、人々が自然と共に生き、自然を守り、自然を残していくには自然の成り立ちを理解していく必要がある。

特に生物環境のサイクルは山の生物から海の生物へと密接に関わっており、このサイクルを壊すことはできないし、このような状況を総合的に原体験することによって、自然環境への理解を深め、自然環境への配慮（野外活動におけるローインパクトの精神）を学習することができるものと仮定し、キャンプを通じて環境に関わる知識及び態度の変容について調べることを目的とした。

### 3、調査方法

本研究は、「N体育大学社会体育体育学科野外集中実技・キャンプ」を履修したキャンパーを対象に独自の質問紙を作成し、キャンパーに記述方式でキャンプ前、キャンプ後、3か月後と3回に渡って記述させた。

調査期間は1997年9月1日から1997年12月10日であった。キャンプ期間は9月1日から9月10日までであったが、その内9月1日から9月3日までは学内事前研修が実施された。

尚、参加キャンパーは男子4名、女子19名、山のスタッフ4名、海のスタッフ6名であった。

#### 4、キャンプの概要・プログラム

本キャンプは自然環境の中で幅広い自然体験活動として、山のプログラムと海のプログラムを設定し、トータル的な野外活動体験を通じて自然環境との関わりを体験できる場所として沖縄県八重山郡竹富町西表島で実施した。尚、今回実施したプログラムは別紙の通りである。

#### 5、結果及び考察

##### ①自然観について

キャンパーの自然観についての結果を見ると事前調査では「山は緑に囲まれ、草木が多く、蒸し暑い感じでジャングルの様である」「海は青くきれいで透き通っている」というように、初めて行く沖縄・西表という場所から神秘的なイメージを持っているようであった。また、「山には見たことのない虫やハブが沢山いそう」「海はサングや色とりどりの魚が多く見られそう」と個々に於けるテレビ番組などの情報収集によって様々なイメージを形成しているようであった。

自然に対して「自然は偉大で人間は其中で試されている様な気がする」「自然は何が起こるか分からないので、臨機応変に対応する」「自然は魅力あるが時には危険である」というように自然と人との関わりについて何らかの意識を持っているようであった。

事後調査では「山も海も想像していたよりもすごくきれいで感動した」「日本にもこの様にきれいな場所があることを実感した」というような自然観に対する回答が得られた。

また、「見たことのない動植物がいっぱい」というように多くの生物の存在を再認識したようであった。

キャンプの目標である山と海との関係をトータル的に見ると云うことから「山があつて海があると云うように山と海は別のものではないことが分かった」「山と海は一体であり、地球上の基本を造っている」というように、自然環境は一連のものとして、とらえようとしていることが伺えた。それは「全ての自然は本当に無駄がなく、人間は逆に無駄を持っていると痛感した」という自然に対する回答をみることでできた。

今回のキャンプではあまり天候に恵まれず、山のプログラムに於ては強風・集中豪雨・落雷などに見舞われたり、仲間が怪我をしてしまうというハプニングから「自然は非常に厳しいものであった」「自然は怖い」という別の自然に対する回答が寄せられた。

この回答は3か月後の調査にも表われ「自然は甘くない、厳しいものだ」と実感した」「天候は変わりやすい、しっかりと知識をもって接することである」と印象が残っていることが伺えた。同様に、自然観としては「山には野生生物がいっぱい、海は青く透き通るイメージが残っている」「きれいな山や海・動植物をみて感動したことを覚えている」というように印象ははっきりしているようであった。

所が、これらの印象とは別に「共存できるようなきれいな環境として大切にしたい」「他の人達が、野生生物を傷付けないかと心配である」「エコキャンプの大切さを知った」というように自然に対する保護の意識面が出てきていることに興味付けられた。

##### ②自然保護について

自然保護の項目について事前調査を見ると「自然保護のためにはゴミを捨てない、ゴミ

は持って帰る」「自然保護のためには木を切ったり、海には汚水や重油などを垂れ流してはいけない」という多くの回答が得られ、基本的な環境に対するルールを認識しているようであった。中には「自然は人間によって壊されている」「自然を目的もなく壊してはいけない」「自然保護することはすごく大切なことである」という様に、自然保護の観点から自然に対する取り組みのあり方についての考えをもった回答も見られた。

直後調査では西表の自然の美しさについて①の自然観からも分かるように「ゴミを捨てるという行為が恥ずかしい」「ゴミが落ちていたら拾い持ち帰る」という意識行動に変わってきたことが伺えた。また、自然に対しては「人間ひとり一人の努力の積み重ねが自然を守ることに繋がると思った」「自然は壊れるのは早いけど、復帰するのは遅いからもっと大切にすべきだ」という自然への対応姿勢が見受けられるとともに、野生生物に対しては「山も海もそこにいる生物が主役である」「実際に山や海を見て野生生物の生活の仕組みを大切にし、壊してはいけないことが良く理解できた」「サンゴが傷ついていて心が痛んだ」という回答から見受けられるように、キャンパーは自然環境のについて体験を通して良く観察している姿勢が伺えた。

このことは3か月後の調査結果から「自然が色濃く残る山や海を見ることによって、今迄以上に環境問題などに関心を持てる様になったと思う」「山や海が在って初めて人間が生きられるということを感じた。自然は人間にとって大切なものである」「工夫をすれば沢山の自然保護活動ができるということが分かった。これからの自然を守っていかなくてはならないことを強く感じた」という回答に見られる様に、自然保護への強い意識としてはっきりと印象づけられていることが伺えた。

また、野外活動と自然保護の関わりから「自然にはルールがあり、ルールを守らないものは罰が与えられる。人間はそのことを早く理解しなくてはならないと思う」「自然に対しても計画・運営・管理法を確り身に付け実行するようにしなければならないと考える」と、野外活動のコンセプトに関わる定義を含んだ回答も伺えた。

### ③安全衛生管理について

安全衛生管理（リスクマネジメント）についての事前調査においては「生水や食料に注意したい」「山でのトイレが心配」という野外生活に関わる基本的な項目に関する不安や「危険な動植物に対する対処はどうか」「緊急時に於ける安全対策は」などと野外活動に関する不安感を訴えているキャンパーも見受けられた。中には「自然は何時どの様に変化するかわからない、常に最悪の事態を想定し、臨機応変に対処する」「自然のために管理することは人間を安全に配慮し守ることである」と自然に対するリスク認識を持っている回答も見られた。

直後の調査では、前述したように山のプログラムで強風・集中豪雨・落雷・仲間の負傷といったアクシデントに見舞われたため、「テントは場所と張り方で雨漏りと浸水が全く違うというように、テンティングについて学べ勉強になった」「晴天だけだったならば正しいテントの張り方が分からないで終わっていた」と野外生活技術（テンティング）に関する技術の向上が見られたようであった。全体のプログラムを通して「山や海は常に危険に満ちている、気の緩みが事故を招くので、慎重に行動しなくてはならない」「一人の怪我や病気が全体に大きな影響を与えることを学んだ」という対自然への対処法と健康への自

己管理について改めて認識を示した回答が得られた。

3か月後の調査では、精神的・身体的体験リスクがインパクトとして大きく残っているようで「自然を甘く見ないで、いつも緊張観をもち状況を理解した行動をしなければいけないと思った」「救急処置の方法と未然に防ぐ対処法を身につけておくべきである」「自然は必ず危険がつきまとう、そのことを何時も踏まえて行動すべきであると考えようになった」というような回答が得られた。また、自然現象だけではなく、危険な動植物に対しても配慮すべきであるという回答が得られ、これからの野外活動に於てのリスクに対する考え方に影響を及ぼしていることが伺えた。

#### ④仲間について

仲間関係について事前調査では「お互いに協力し助けあっていきたい」「あまり交流がないので、この機会に仲良くなりしたい」などと漠然とした仲間意識しかない集まりであることが見られた。

直後調査では「仲間意識を感じ、信頼が生れた」「相互援助の重要さと力の大きさを感じた」というように、初めはあまり話もしなかった仲間が同じ食事やプログラムで生活を共にすることによって、協力の大切さを理解しお互いに注意や助言をするようになり、仲間のつながりを示しているようであった。

3か月後の調査では「仲間がいたから楽しかったし、助け合うことのできる大切さを知った」「友達との絆がより深まった」という回答から、普段の生活では協力とか思いやりに対する意識が希薄になりがちであるが、今回のキャンプ活動を通して仲間としてのつながりがますます深くなり、協力したり、相談しあったりして相互の信頼が深まったものであると見ることができた。

## 6、結 論

今回のエコキャンプを通じて得られた結果をまとめると、次のように結論づけられた。

- 1) 未知での体験刺激は後々まで継続的にかつ鮮明に残る。
- 2) 良い環境の中で培った学習体験はこれからの自然に対し積極的に守りたい、残したいという自然観と意識変化を持つようになる。
- 3) 自然に対して一人一人が変われば自然は守れる。延ては自然保護につながる。
- 4) 山の自然を守ることは海の健康を守ることであり、山と海の自然環境を一体的にとらえる教育的プログラムを組む必要がある。
- 5) 野外生活・活動に於ける諸技術・知識は最低限修得しておく必要がある。それは自己防衛（精神的・身体的リスクの軽減）という観点からも重要である。
- 6) ストレス体験を克服した集団はより強い仲間意識と価値観を持つようになる。

野外活動は自然環境の中で自然の素晴らしさと人として生きる喜びを肌で感じ、人間性の回復を求めようとする活動で、それは自然環境との関わりの中で営まれるものである。

エコキャンプは自然環境へのあり方と接し方を野外活動を通じて学習することにあり、その教育的効果は有意義なものがある。また、自然環境をとらえる手法として野外活動をスポットからラインへと拡大することによって、その学習効果は一層の深まりを見ることができると結論づけられる。